



浜林 正夫著

『パブと労働組合』

島崎 晴哉

イギリス労働運動史をかじったことのある者には多少とも知られている主題が、全くの新鮮味を帯びて提供されるのが本書である。「組合活動の日常的なところに入り込んでみたかった」と著者は言われるが(まえがき)、言うべくして容易ではないこのねらいが見事な手さばきで果たされていて読者をひきつける。標題は本書全体の空気を伝えて余すところがない。

本書はイギリス労働運動史についてのエッセイ集である。主として18・19世紀に題材をとり、11編が集められている(他にコラム3点)。標題のものを頭にして、結社法と主従法、ラダイツ運動、ストライキ、職業別組合の典型・植字工組合、女性・農業労働者と労働組合、労働日、さらにはイギリスの「タコ部屋」、また『共産党宣言』の最初の英語訳、など興味ある主題がどこからでも読み始められる形で描かれている。

本書の読者として、改めて痛感させられたのはイギリス労働運動の厚みである。運動そのもののいわ

ば老舗の厚みはもとよりとして、運動にかかわる記録や報道、さらにはそれに基づく研究成果の厚みにはいまさらながら圧倒される。著者が「民主主義のいわば底力の差」と言われるのがまさに納得的である。そしてこの厚みを本書はいかんとなく伝えてくれるのである。

読み進むほどに関心をかき立てられ多くの教示を受けた。結社法と主従法についての2編では、それぞれの成立と撤廃の背景や交錯した展開過程が克明に追われていること、とくに結社禁止法の前段のロンドン通信協会の運動の比重が印象づけられた。ラダイツについては最近の研究水準を実感させられたが、とくに農村ラダイツの重みに教えられた。中でも道路の保守・管理の歴史、登場したターンパイクに向けられたラダイツの指摘には、歴史を今にの思いが残った(123ページの年号は誤植ではないだろうか)。さらに「女性と労働組合」の項では既成組合への女性の加入を認めないいわゆる「性別隔離」の長年にわたる存続に驚かされたし、農業労働者の組合運動の高揚と衰退の激しさ、また「労働日」、「植字工組合」の項に現れたワークシェアリング、サービス残業の故事も印象的であつた。著者ならではのと思われたのは、「団結」と「結社」の用語の別、トレード・ユニオンのトレード、あるいはストライキの語源、赤旗の由来などについての指摘。そこでは是非とも教示のほしかったのは「団体交渉」の用語についてである。

(新日本出版社・2002年12月刊・2300円)

(しまざき はるや・理事)

次号No. 51 (2003年夏季号) 予告

(特集) 均等待遇と賃金問題

——賃金の「世帯単位から個人単位へ」

をめぐる論点の整理と提言——

(基礎理論プロジェクト報告書)